

住文化における本音と建前

道家達将（東京工業大学 教授）

——住文化にみる近代化の足跡・体験的住居論——

はじめに

科学・技術史を研究してきたものとして、「住文化における本音と建前」と題して「住文化にみる近代化の足跡」を論ぜよと、畏友平井聖さんから命じられた。

正直なところ困った。建築に興味はあっても建築学にはまるっきりの素人である。

しかし、考えてみると、科学・技術史の冒頭で私は、いつもこう述べてきた。人類が地上に現れて約300万年、何十万世代にわたって今日まで何をしてきたのか。基本的にはよりよい食・衣・住、そして、健康・文化を求めて働き続け、その中で子孫を産み育ててきた。これらを実現するために人間は、全身で自然に働きかけ、巧みに自然を利用し、変革し、その過程で、有用な技術、科学を入手し、これを財産として利用しつつ今日に至ったと。

加えて、この60年間、私自身紛れもなく、住文化の恩恵を受けて1日1日を生きのびてきた。

そこで、この機会に、平井さんの提起された課題について考えてみることにした。しかし、やはり、論文などと言えるものではなく、「私の体験を通してみた住に関する一考察」といったところである。お許しいただきたい。

1. 住居における本音と建前

人間にとって、本音と建前が一致すればそんな良いことはない。しかし、現実にはそうはいかない。人間は本音と建前の間をうろうろしながら生きている。住居に対する人間のあり方においてもそうだ。実際には、中に住む人間どうしのあり方の方が問題であるが、それが、家という物的な存在のあり方ひとつで随分と違って来る。

人間、一步家の外に出れば、本音の吐けない、ストレス社会であり建前社会である。それだけに、誰もせめて自分の家の中でくらは、本音で生きたいと思う。しかし、家の中でも容易には、本音で生きられないのが実情である。困ったことに、本音というものは、一人の人間、つまり自分ひとりでも、いつも同じとは限らない。とりわけ、若い成長期、いや大人になっても、変化の激しい時期は揺れ動く。今日のような世の中では、社会の

変動が激しいだけに、家族の全員がその波をかぶって、全員が揺れ動くから、いっそう始末が悪い。

ならば、みんな個室で暮せば。という考えも出るが、そう簡単なものでもない。本音で生きるにはそれなりの装置；寝、食の場はもとよりのこと、トイレ、風呂、炊事場、テレビ、楽器、電話等…が要るし、仮に金と空間が十分にあって、これらが揃ったとしても、やはり、人間孤独では生きられない。人恋しいものである。これも本音である。そして、人間が複数になれば、本音が複雑にからみ合い、うまくやっていくための建前が要求される。問題は、家族の個々人の本音ができるだけ生かされるような形に、住居の構造、機能、そして人間の建前がつくられる必要がある、ということである。それは、同居する人間が、自分の本音も出せるが他人の本音も許せるような住居ということである。

私の経験から、結論づけて言えば、どうも、住居というものは、できるだけ4次元的可変な4次元空間として建てられるべきではないかという気がする。つまり、時の推移の中で、複数の居住者の本音の変化に伴って、各人の本音を出し合い、それを尊重して、個室ならびに共同利用の場を容易に作りかえることができるような住居が良いと思うのである。

もし、作りかえられないのであれば、ヤドカリのように住み替えてゆくということでもよい。いずれにせよ、人それぞれの変化に応じて住居もかえてゆけるというのがよいと思うのである。

昔から行なわれてきた建て増しも、同じ発想に基づく、ひとつの解決法であろうが、それは、土地が十分あって可能なことである。狭い土地にいる場合、今や建て増しをはかろうと思えば、横方向でなく上方か下方にしかできない。それはもう建て替えである。

戦後、アメリカ式の使い棄て文化にどっぷりつかってきた日本であるが、住居も短い期間だけ使ってスクラップ化する使い棄て方式、というわけにはいきまい。現実には、「これは仮り住いだ」と自分に言い聞かせるような安っぽい住居が、高い値段で取引され、使い棄て方式の方向に進みつつあるような気がする。しかし、そのような住居は中に住む人間の心まで貧しくしてしまう。私は、スクラップ化するのが惜しまれるような、文化的に

高度な住居に住みたい。それは、今日深刻化しつつある地球資源の浪費や環境の不可逆的破壊を止めることにも通じる。日本の現状は、土地代が異常に高く、それを困難にしており、庶民が文化的に高度な住居に住むなどということは贅沢な話だという雰囲気があるが、行政の問題を含めて解決をはかれば、庶民が文化的に高度な住居に住むことは不可能なことではない。それを可能にするには、まず、自分の本音で、どういう住居に住みたいかを、自分で考えてみるころから出発すべきであろう。そしてその実現には、人生(他人の人生も含む)、もの(生きている自然を含む)、金(社会的富を含む)の100年にわたる輪廻を見通した計画が必要で、出来上った建築物が数十年の長期にわたって変わらない、いや変えてはいけな基本的部分と、短期間で可変的な、言い換えれば、住人が変えなくなったときにいつでも変えられるような可変的部分とを矛盾なく共存させている構造体になっていることが望ましい。もちろん可変部分の割合が大きいほど良い。そうすれば、いつ、誰にとっても本音で生きられる住宅が得やすいということである。

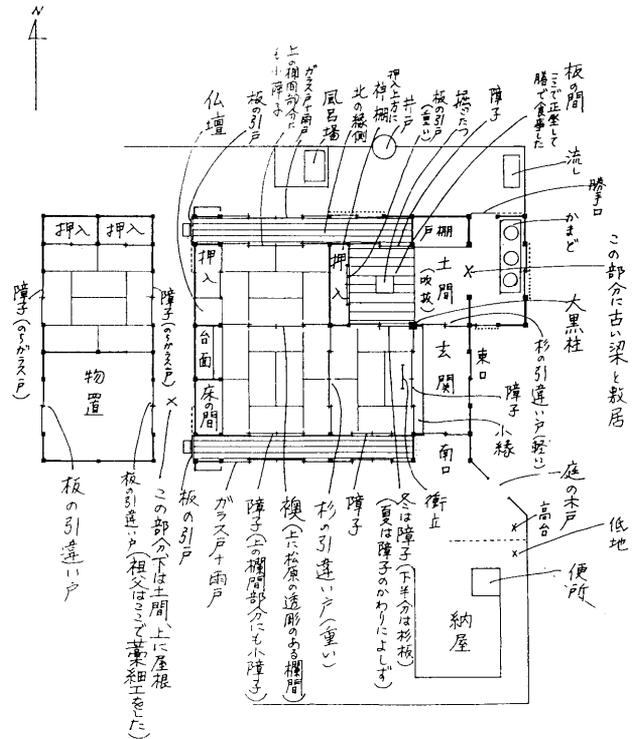


図1 大正末年頃築の私の家

2. 私が育った大正末年築の在来開放型住居について

私は、昭和3年生れで、幼少年時代を名古屋市と川ひとつ隔てた市外の在来開放型木造住居で過した。学校の方は市内の鉄筋コンクリートの閉鎖型3階建であった。その住居は、ごく普通の農家風民家で、幅数十メートルの川に面した小高い丘の南斜面にあり、西北約50mに寺(曹洞宗の宝勝寺)と城跡(守山城)が、また東北約50mに古墳らしい小山の上に氏神さん(白山神社)がある。この城跡と神社の間に、昭和初期には約30戸ほどの、私の家とはほぼ同規模の民家があった。

(1) 開放型空間——まるで「お拝殿」

私の育った家の間取りは図1のようであった。明治4年生れの私の祖父が、長男つまり私の父に嫁を迎えることになったので、大正末年に古い家を壊して新築したのがこの家だという。普請を宮大工の加藤國雄さんに頼み、自分も手伝って建てたと祖父は言っていた。自分が建てたという思いが強く、この家をたいへんよく管理し、また誇りにもしていた。私が物心つく頃この祖父は、数反の田畑を耕して米や野菜をつくり、気むずかしいが、何事にも名人芸の人であった。父は、サラリーマンとして私鉄に勤めていた。母が嫁にきた頃、この家には7人が住んでいた。祖父母と、その子4人(男3人、女1人)と、長男の嫁である私の母とである。この第2世代は、昭和13年にかけて次々と独立していき、代わって第3世代の私たち兄弟が生まれ、育てられた。私の幼い頃の記憶では、たえずおおぜいの家族が食事を共にし、また来客

で賑わって陽気であった。

この家は、母屋とそれに附属する2つの建物から成っていた。母屋は、戸、襖、障子を外してしまえば、つまり昼間はほぼ完全な開放空間をなす住居で、その西側に隣接する小住居は、壁部分の多い、半ば閉鎖された空間をなす住居と物置であった。もうひとつの、母屋から離れたところにある建物は、3方壁に囲まれた納屋に、便所が附置されたものであった。ただし、この納屋は、かなり丈夫に造られており、後に改造し、建て増して、私の第一家が住んだ。

さて、母屋であるが、まず立体的に見ると、土間と床上部の境に立つ大黒柱を中心に、柱と梁で組み立てられ、床高は1尺5寸あまり、床上から天井板までは8尺3寸、天井裏から屋根裏のいちばん高いところまで8尺3寸、基本的には、平屋建である。(敷居から鴨居まで、つまり障子の実質部分は、5尺8寸である。)玄関の上部のみが厚い板を敷いた2階になっていて、4畳ほどの屋根裏部屋がしつらえてある。後でまた述べるが、土間上部のみは天井がなく、屋根裏まで吹抜きになっている。

次はこの母屋の平面であるが、今流に言えば3LDKであろうか。床上部分は、6・8・6畳の畳の間と、3畳の板の間、それに南と北に2本の縁側(南3尺2寸、北2尺6寸5分)があって、全体として床上部分の平面は、南北方向にやや長い長方形になっている。さらにこれに、東側に玄関と土間が付け加わって、今度は東西に長くなり、さらに、かまどの部屋が張り出している。そして、流し、井戸、風呂場は、家の外部北側にあった。

この母屋は、先にも述べたように、雨戸をくり、ガラス戸、障子、襖、杉の板戸などを開け放す、さらに取り払ってしまい、仏壇の扉を閉め、押入れを閉め、壁ぎわにたんす類を押しつけると、床上部はほぼ完全な開放空間になる。床の上には何もなく、中央北の壁3面と杉板戸からなる押入れを中心とした回り廊下、いや屋根と柱と高床から成る神社の拝殿にさへ似ている。『すまいろん』1989年冬号で、中国の朱曉雲さんが、「日本の伝統的住居には壁らしい壁が存在せず、中国の住居を『箱』にたとえるならば、日本の住居は『傘』のように思われる。中国人の私は、初めてこのような空間に生活するようになった時、落ち着かなかつた¹⁾と書いておられるのを読んで、なるほどと思った。まさにそうである。私は、幼年時代、家の中で追いかけてこをして、中央部北の押入れと玄関に近い6畳間と8畳間の間の周囲をグルグル回った記憶がある。さらに、床の上だけでなく、玄関と土間を使うと、土の上で、この家の内外を歩いて1巡できた。家の内外をグルグル回って、それでも足りなければ、庭の茂み、木の上、さらに寺の森、氏神の森、川原があった。すなわち、家の中を駆け回る子供たちの床上平面は、たちまち、大地の自然の平面、そして凹凸に拡大され、再び家に戻るときには、縁の下を含めて家は巨大な立体的遊び場となった。子供にとって、かくも面白い「遊びの空間」としての住居を、以後私は知らない。まさに子供の天国であった。

しかし、大人たちが家にいたり、仕事が始まると事態は一変した。庭は作業場、かまどのある部屋は立入禁止、そして、床の上は閉空間になり、子供たちは、1室に閉じこめられるか、戸外に追い払われた。

(2) 火と祈りと食の空間

——かまど・土間・3畳の板の間の生活

食事の時間ともなれば、先程まで回り廊下の一部であった3畳の板の間と土間が、食堂として閉空間になる。席はほぼ決まっていた。家の長である祖父は大黒柱の前に坐し、その隣に祖母そして父が、続いて、孫たちが、板の間に正坐し、そして、叔父はたいていの場合土間の腰掛けにかけて、各人の前に並べられた膳で食事をした。母は、給仕に忙しく、みんなの食事が終るまで、自分の食事をとることができなかつた。ふだんは楽しかったが、癩癩もちの祖父の機嫌の悪いときは、ろくに食事がのどを通らなかつた。飯の炊き方が悪いとあって、土間に茶碗を叩きつけ、茶の湯がぬるいといって、沸し直すように、嫁（つまり私の母）に命じた。気まずい沈黙が部屋中をおおった。晩酌で機嫌の良いときは、親（曾祖父）が道楽をして、裏にあった蔵が売られていったのが悲しかったとか、奉公に出た先の味噌汁が冷えていて情けなかつたとか兄（祖父の）が、事業に失敗したのは女房が

派手好きな女だったからだとか、といった昔話が多く、終ると、御飯茶碗に茶を入れて、傾けながらゆっくり回し、ぐいっと飲みほし、押しただいて膳の中にポンと伏せた。

この食堂(?)は、私にとって不思議な空間であった。構造的には、かまどのある部屋と板の間の食堂とにはさまれた土間の上深く、屋根裏まで吹抜きの空間がある。正坐した頭の上には神棚があるが、これはふりかえらなければ見えない。正坐した私の視線に映るのは、まず土間の真黒の土、その向こうに、かまどが眼に入る。その上に、磨かれた大きな鉄の釜と鍋、そして小さな茶釜がかかっている。その上方手前、土間とかまどのある部屋を仕切る部分に、すすけた太い梁が1本見える。この梁にはちょうど削った跡が残っている。大正末まで、ここに建っていた家に使われていた材を使ったものだと、祖父から聞いた。そしてこの梁の上には2間の幅の壁がずうっと立ち上がっており、途中右側に、玄関上の2階を覗きながら屋根裏まで続いている。土間面から屋根裏最深部までの高さは、1丈と8尺ほどになるのではなからうか。この大きな壁面は、食堂の端にある大黒柱と向かい合って立ち、^{くぐん}件の玄関上の2階入口のところで、これまた大黒柱に負けない太さの梁によって大黒柱と結びつけられている。この梁は、ゆるやかにうねった天然木のままの形をしている。どうしてこのような空間を作ったのか聞きそびれたが、玄関上に設けられた4畳ほどの2階を蚕室として用意したとするならば（そういう話を聞いた）、冬場における保温のための構造であったかとも思われる。この2階は、かまどで暖められた空気^{のせい}のせいか、冬は比較的暖かく、夏場は南側を開くと涼しい風が通った。ふだんは、ここに上る階段はなかつた。

大壁の真ん中の柱に、その昔、神社のお札が張ってあったことを思うと、あるいは、この空間は祈りの空間であったかもしれないが、私たち子供にとっては、祈りは正月くらいのもので、それも、かまどや、えびす・だいきくさん、神棚、井戸、床の間、そして仏壇にウラジロに載せた鏡餅をお供えして、近所の氏神さんにお参りするの^がせいっぱい^のこと^でであった。そういえばこの餅は、この土間に臼を据えて、かまどで蒸した米を入れてついた。いくら杵を振り上げて上にもぶつかる心配はなかつたし、餅をつく音が心地よく反響して、正月が来ることを実感させた。つき上がった餅は、鏡餅のほか、板の間で新聞紙くらいの大きさにのされ、6畳間の新しい藁の上に、ずらりと並べられた。この空間は間違いなく生活の場であり、かまどの火はその原動力であった。

食事関係のほか、この3畳の板の間には冬の間掘りごたつの口が開けられ、遅くまで家族の談笑の場、新聞や雑誌を読む場になり、風呂に入るのにも、ここで半分脱衣して風呂場へ入った。ラジオとテレビも、この板の間

に置かれた。まさに火に引き寄せられて暮す家族のぬくもりの場であった。

しかし、私にとってはぬくもりと言えば、掘りごたつよりかまどの前の方がより存在度が高かったかもしれない。母は、ほとんど掘りごたつにいなかった。多忙な母と話をするには、食事の仕度、とくに御飯を炊くときの母をつかまえるのがいちばん都合だったからである。御飯炊きは、1升もの米を、藁を燃料に炊かねばならぬためにとくにコツが必要であった。少なくとも炊き上がるまでは、かまどの前を離れるわけにはいかなかった。例えば、小学生のとき、宿題に出た九九の暗唱を母に聞いてもらったのもこのかまどの前であったと記憶する。また、早い時期から、この藁で御飯を炊く方法を教わりもしたが、炊きそこなったときのことを考えると、まさに真剣勝負の思いであった。

それやこれやで、昭和初期から中期にかけてのこの、かまど+土間+3畳の板の間の空間は、上の方に住む(?)この家の守り神(それは、ちょうなの跡のある梁に見られるような先祖も加わっていた)と、下の方で喜怒哀楽をあらわにして賑やかに生活する家族たちが渾然一体になっていた場であり、また、知らず知らずのうちに行なわれた祖父による教育の場でもあったようだ。しかし、やはり、ここで本音を言え、本音通りに振舞うことのできたのは祖父だけであった。長男の嫁は建前ばかりを強制され、後で述べるように、それなりの理由があったが、戸外の流しを家の中へ入れることを言い出すことさえできなかった。私の妻や子にとっては、家の中の勝手場も上記空間も、ただ暗くて寒いだけであった。

(3) 客の応待の場

客は概ね3種類に分けられた。ごく親しい人や急ぎの人は、玄関先の小縁に座布団を敷いて腰を下ろし、あるいは、土足のまま土間に入って腰かけてもらって応接した。やや改った人は、玄関に続く6畳間で(奥の8畳との間は、たいていの場合、杉の板戸が閉められていた)、改った人は奥の8畳間に通して応接した。お盆には先祖の位牌を小机に載せて祭壇を設けたが、お坊さんと呼んでお経を読んでもらって供養するのは8畳の間であった。村(町内)の寄合いや、多くの人の集まる仏事・慶事などは、6・8・6畳の3部屋ぶちぬきで、ないしは、6・8畳を組み合わせて使った。食事には、朱と黒の塗りの膳が使われ、床柱を背に1列と、向かい合ってもう1列ずらりと並んで行なわれることが多かった。今の温泉旅館の宴会と同じ姿であった。

玄関に近い6畳間の玄関側の障子は、ふだんは半開きにしてあり、ここに、冬は襖紙貼りの、夏は、細い竹製の衝立が置いてあった。そして玄関のたたきには、棕櫚竹などの鉢が置いてあった。

(4) 夜は閉鎖空間に

さて、夜、雨戸を閉めて寝る段になると、この家の空間は一変する。各部屋ごとの閉空間になってしまうのだ。昭和初期には、玄関に近い6畳には祖父とその息子つまり私の叔父たち2人の寝室、8畳は叔父の書の学習室、奥の仏壇のある6畳間は長男(私の父)とその嫁の寝室に、食堂の板の間も学習室に変化した。泊り客のあるときは戸外の便所への道の都合で、むしろ入口の6畳間か、8畳間に泊めた。

もうひとつの西隣に離れてあった8畳の部屋には、祖母と娘が寝た。

この離れた8畳の部屋は、面白い役割を果たした。後に、祖父の娘が嫁に行き次男が独立していったからは、祖父母の寝室となり、一時は、3男が嫁をもらったときの居室にもなった。この部屋は、東にも西にも障子があったが、ほとんど独立した閉空間として機能した。

昭和10年代に入ると、3世代目の私たちの兄弟が、母屋の6畳間と8畳間、を占領し、寝室や勉強部屋として使った。南北2本の縁側が廊下として機能し、その西端の引き戸と、踏み台が、他の部屋を通らなくても、どの部屋からも直接外部に(トイレに)行くことを可能にしていた。

(5) 開放空間の天然冷暖房

この家の冬の日常の暖房装置と言えば、ごく最近まで、掘りごたつと火鉢であった。ただし、夜の老人には、たどん入りのこたつか、湯たんぽを布団に入れた。もちろん、部屋は障子、ガラス戸、襖、雨戸を閉めただけの状態であった。その代わり、布団は、綿が多くつまった部厚なものであった。冬の夜の縁側の冷たい感触は、今でも足の裏に残っているが、寝ていて寒かった記憶には乏しい。小さい頃から慣らされていたからであろう。この家に住んで、冬の寒さに耐えられなかったという印象はないが、手足の凍傷には悩まされた。母のあかぎれも痛々しかった。それにしても流しが屋外にあるのは母に気の毒だった。これは父の妹が祖父に話して屋内に入れることにしたというが、家の中に水を入れるのをそんなに嫌ったのだろうか、それとも、流しは外にあるものとの長い習慣だったのだろうか。どうも、私の見るところ、物的な問題を含め、祖父は頭から、「流しは外」としていったように思え、その点、祖父の元気な頃は、封建的で頑固で家の中の様式を変えることは容易ではなかった。

夏は、私にとっては快適であった。もちろん冷房は自然の風だけ、家中を開け放すと庭の木々を渡って入ってくる風が心地良く、とくに北側の部屋は涼しかった。北側の屋根が大きいせいもあった。風のないときは、庭の木蔭に蓆を敷いて机を運び出せばよい。それでも暑くて、

クマゼミやアブラゼミの鳴き声が耳を聳せんばかりのときは、もう、近くの川へ泳ぎに行ったり、四つ手綱をもって魚取りである。帰った後昼寝をすれば最高である。3時を過ぎれば、たいていの暑さはやわらいだ。

こういった田舎の暮しは、市内の学友たちにも魅力的だったに違いない。商店の子、お屋敷の子、洋館の子らが次々と遊びにきて、共に騒いだ。もちろんこれは、昭和15（1940）年くらいまでのことである。やがて、戦争が激化し、それどころではなくなってしまった。

(6) 手入れによって共に生きる —— 住人と家との交流

もっとも、すべてが良かったわけではない。熱暑の夜など、雨戸を閉めきった上に蚊帳の中で寝なくてはならない、扇風機はなく、古い蚊帳は木綿で暑苦しかった。

さらに言えば、遊びたい盛りの私にとって、家の管理のために働かされるのも楽ではなかった。ほとんど毎日の玄関の掃除、はたきによる障子のほこり落とし、そして縁側と板の間、ときに畳の雑巾かけ、井戸の水汲み、かまどの燃料の藁運び、ときには、数キロ離れた山林の松林へ火つけ用の枯れた松葉や枯れ枝を集めにリヤカーをひいて母と行った。さらには、祖父の田の草とりや、農作業の手伝いもさせられた。大掃除の畳あげと、障子の貼り替えは大仕事だった。しかし、よく考えてみると、この家はたえずまめに手を入れることによって生き続けているという特質があったように思う。

過ぎ去ったことだからかもしれないし、大人たちが子供たちを使うのがうまかったのかもしれないが、結果的には、結構楽しかったという印象がある。このような家の維持管理のための労働への参加の故であろうか、私はひとしお、木の柱、とくに大黒柱の滑らかで安定した感触、畳や床の感触、障子の和紙の白くほの明るい感じなどが何とも言えず好きである。朝、心地よく目覚めたときの天井板の柂目や欄間の松並木の透し彫りの風景なども快いものであった。

高品質の木の良さは、飽きがこないばかりか、語りかけて来るようなところがある。成長して家を出るとき、まさか大黒柱というわけにはいかないが、長年この家で使われてきた、古い坐り机を頂戴してきた。今も、閉空間の応接間に置いて、使っているが、この机の前に坐ると落ち着く。

木と言え、祖父は生きた樹もうまく使っていた。例えば、離れの便所への通路を変えたとき、母屋の縁側のどこからもこの便所の入口が見えないようにと、南天をもってきて目隠しをした。ハエが南天の虫媒の役割をして実が多くつくようでもある。四季の美しい花をつける樹にまじってニワトコなど、漢方薬の利尿剤になるような木も植えていた。母も庭の四季折々の花を、花瓶に活

けるだけでなく仏壇に供えるのを日常としている。

木と言え、もうひとつ。この話を聞くと、葦山の江川太郎左衛門の700年以上に及んで健在と聞いた家を思うのであるが、祖父は、この家は、地震にも台風にも洪水にも大丈夫だと言っていた。地震については、地面が元山で、しっかりしている。濃尾大地震のとき、地盤の悪いところは、たいへんなことになったから、地盤の良いところを選んで建てたといひ、そして台風に対しては、北はやや高台だから心配なく、南からの風は木によって防ぐ、と棕の巨木を配していた。台風の日、庭のこの棕の枝や葉が風にあおられて、巨人が髪を振り回すように渦巻くのを見ながら、あれが家を守ってくれている姿かと思ったものだ。洪水に対しては、堤防より高い台地にあるということであろう。今日、家を建てるときに、こういう選地をする余地はほとんどないが、公的にも留意すべきことではある。どの地域も100年に1回くらいの割合で、天災は必ず襲って来る。子孫のために美田を買うのはともかくとして、子孫のために、良い地盤を選ぶことは、建築の基本条件のひとつであろう。少なくとも、私どもは、祖父に感謝している。

こうみえてくると、この住居は、自然とともに在るだけでなく、時間をも取りこんで生きているように思えて来る。住居とは、こういうものでなければならぬのではあるまいか。

(7) 市内の閉空間の良さ

もっとも、この家のような傘型開放空間のみではなく、箱型閉空間にも良いところがあること、とくに、町なかでは、閉空間でなくてはやっていけないことも、小学校時代に市内の友人の家に遊びに行き、痛感したこともあった。第1、コンクリート製の小学校の建物は安定感、安心感があった。事実、台風でも、地震でもびくともしなかった。台風の時、わが家が、玄関にわかづくりのかんぬきを取りつけたり、板戸を杉板やたる木で押えて釘づけにしたり、大騒ぎせねばならぬことと思わせるとうそのように静かだった。ガス、水道、冷蔵庫などの便利さには、いたく感心もした。暖炉のある部屋は、同じ火を使っても、わが家のかまどの空間とは大違いで、明るくスマートに見えた。ピアノに至っては、和風の部屋では床が抜けて置けない、書棚の床もとくに丈夫に造ってあると言われて、そういうものかと思ひもした。

(8) 「作品」への祖父の執念

昭和16（1941）年、戦争はさらに拡大され、やがて学区の家々はあらかた焼け、洋式の家並は暖炉の煙突の行列に変わり、何人もの友人や親兄弟が死んだ。爆弾で校舎の壁にも大穴があいた。幸い私の家は焼失をまぬがれた。祖父は、空襲中もみんなの制止をふりきって、防空

壕に入らず家を見守り、屋根にひっかかった焼夷弾を手製の縄火消しで叩き落とし、「くそ、俺の建てた家を焼かれてたまるか」と言ったと伝えられている。自分の「作品」を守る命がけの執念のようなものを感じた。戦後、天井裏から、高射砲弾の破片らしいものが幾つも見つかった。瓦は何箇所も割れ、柱はずれ、あちらこちら傷んでいたが、家は建っていた。

(9) 欲しくなった閉空間

ところで、戦後、再びこの家から旧制の高校に通うようになった私は、これまで親しんできた開放空間が嫌になり、というより、家族と顔を合わせるのがうっとうしくなり、完全な個室が欲しくなった。誰にも煩わされることのない読書三昧の生活がしたかった。しかし家を出るだけの金はない。このとき眼に入ったのが庭の隅にあった2坪ばかりの丸太と杉板の小屋であった。屋根はトタンであったがまだ使えた。これを自分で改造した。窓と扉を付けて風が通るようにして、本箱と布団を持ち込んで独立した。しかし長続きはしなかった。住心地が悪かったのである。結局私は母屋に戻ったが、やがて本当に家を離れて独立した。

(10) 変化に応じて改造——可変空間の立証

その後も、祖父母と両親と2人の弟たち6人が住み続け、やがて弟がここで世帯をもつようになるが、戦時中の爆風で傷んだこの家を特大級の伊勢湾台風が直撃し、風に乗ってきた丸太棒が雨戸に突き刺さり、瓦がずれて、さすがのこの家も、押入れの中まで雨が入って水びたしになった。ついに長年の畳を棄てて、仏間を除く2つの部屋を板の間に変えた。これは弟がアトリエに使うのに好都合だったという理由もあった。祖父母が逝って農業をする人もいなくなり、病むことの多くなった第2世代の両親と、第3世代の生活に都合のよいような改造が、この頃から順次進められた。改造点を列挙してみると次のようになる。

- 1) かまどを撤去し、都市ガス台を置いた。
風呂もガス式にした。(ガスの配管がなされ、引込みが可能になったので)。
- 2) 井戸を廃し水道を引いた。(水道管が、家の前に敷設されたので)。
- 3) 土間とかまどの部屋に木の床を張った。
- 4) トイレを母屋続きの場所に新設、さらに家の中にも坐式のものを新設した。(下水道が完備したので。位置は北側廊下の西の端)。
- 5) 重い、傷んだ木製の雨戸とすり減った敷居を、軽い金属製のものに取り換えた。
- 6) 3畳の板の間に電気ごたつ、続いてガストーブを置いた。

7) 年離れた両親の寝室に、ヒートポンプ式の暖冷房装置を入れ、応接用6畳間に電気カーペットを入れ、火鉢はすべて廃止した。

8) 両親の寝室に低いベッドを入れた。

これらの幾つかは、実はかかりつけの名医師との相談で行なわれた。それは、「病んでも、食堂とトイレにだけは自分の足で歩いてゆきなさい。そうすれば寝たきり老人にはなりません」という示唆に従ったものであった。

何度か大病を患って入退院を繰り返しながら、目下のところは、驚くほどうまくいっている。併せて、驚くべきことは、この築70年の、かなり傷んだ開放空間が、十二分に可変性を持ち、改造にたえているということである。鉄製品の腐食に比べ、ふつうの住宅の木が意外に丈夫なものであることを実感している。

次の改造は、この住居の中の要所要所にたてとよこの手すりを取り付けることと、床の高低部分をなくすことである。これは、ちょっとした段差で、つま先がひっかかって転び、いったん転ぶと筋肉や骨を痛めて、ひとりで立てなくなってしまうことに対する防止策である。足の衰えに比べると手の方は余程しっかりしている。

ヒートポンプ式暖房装置が、障子の部屋に有効であるとは、使ってみるまでわからなかった。障子の和紙が新しいものである限り、紙の微細なすき間に渦巻く空気は予想以上に高い保温機能をもっているようである。ということは、これまで以上にまめに貼り替える必要があるということであるが。繰り返して言えば、古典的な和風開放空間が、現代機器の助けで、さほどの大工事をほどこすこともなく、老人向けに改造できるということである。言い換えれば、開放空間を心地よい開放空間としてだけでなく、構造的にはほぼそのまま、現代的閉空間としても使えるということである。

これは、老いてゆくものにとってありがたいことである。できるだけ他人の世話になりたくないと思ってもそうはいかないが、その本音を、かなりの程度この古い家が叶えてくれるのである。

(11) 妻と私の本音の衝突と和解——その原因の所在

ところで実は、私の妻は、このような改造がなされるまで、本音としてこの在来開放型住居が嫌いであった。無理もない。東京市内で生れ、中国東北部、朝鮮北部、そして北海道で少女時代を送った彼女にとっては、名古屋郊外の在来開放型住居ときたら、夏は暑く寝苦しく、冬は寒くてとても耐えられるものではなかった。中国も朝鮮も北海道も、夏はさわやかで熱帯夜の経験はなく、冬は、戸外の寒さはきびしくても室内はシャツ1枚で過せる暖かさであったという。これは、私自身も冬の北海道に行き実感した。そこでの住居は、箱型の閉空間であった。朝鮮ではオンドルがあった。彼女は、オンドル

こそ最高の暖房装置であると今でも言う。私もそう思う。妻は、壁の多い、箱に出窓を付けたような北の国の閉空間に幼時から暮してきたのである。それは、引き揚げ後の東京でもそうだった。彼女の住居には、早くから石炭ストーブがあり、そして売り出して間もなくのクーラーもあった。工場地帯に隣接した町なかで、家を開け放しておくことは無理なことであった。

もうひとつ、妻の嫌いなものがあった。彼女は、夏日、草いきれだけでかぶれ、カエルを見ただけでほとんど卒倒した。性に合わぬのである。もちろん、緑や草花が嫌いなわけではない。ところが、私の件の実家の庭には、カエルもへびもいた。トカゲもいた。ヒキガエルと青大将の死闘を、何時間もそれこそ息を殺して見入っていたし、ニワトリの卵を飲みこんで頭の上に落ちてくる青大将に何度も出会いもした。(ひととき、敷地内にニワトリが数百羽飼われていた)。私とて、カエルやへび、あるいは天井裏をへびに追われて走り回る家ネズミが好きだったわけではないし、深夜ニワトリを襲うイタチ、あるいは家の中まで上がりこんでは回る大ムカデや鬼グモには閉口した。

実際には程度の違いだけであるが、結婚後^{しばらく}暫して、私が、土をも含む開放空間に暮すことを本音とし、妻が、土など要らぬ閉空間に犬猫も含めて暮すことを本音としていることを知ったときは、その違いの大きさにショックを受けた。私も、犬、猫が嫌いというわけではないが、とくに犬を家の中で飼うことには大きな抵抗感があった。異文化ショックと言えるかもしれない。

どうも、幼時期から少年少女期の住生活にまつわる体験は、いわゆる「おふくろの味噌汁の味」と同じで、後に至るまで、かなり大きな影響を与えるものようである。それは、知的なものというより生理的なもの、感覚的なものと思われる。誰の論議であったか(多分、久野寧氏)忘れたが、人間の汗腺の数は、ほとんど個人差がないが、それが機能する数となると、幼児期、つまり、暑いところで生れたものは、機能する汗腺数が多く、寒いところで生れたものはそれが少ないと聞いた。鮭が大洋を回遊後、生れた川へ帰って来るのも稚魚の時期にその川の水の微妙な匂いの特徴を記憶するからだと言われる。

私と妻の住居に対する本音の違いの主たる原因は、恐らく幼少期の住体験の違いによるものではないかと思う。

3. 昭和32年築東京都住宅供給公社 2K の住み心地

(1) 公園の中の 2K, 最初は天国

では、閉空間志向の妻と開放空間志向の私の 2 人が、

そうとは知らずに結ばれて、最初に暮すことになった住居とは、いったいどのようなものだったのだろうか。矛盾はなかったのか? それがほとんどなかった。幸いにも 2 人とも満足できる快適な住居が得られたのである。それは、抽選で当たった東京都住宅供給公社の鉄筋 4 階建の 4 階 2K の住居であった(図 2)。昭和 32 (1957) 年のことである。新築されたばかりで、南側は数十メートル彼方まで、一面のキャベツ畑が広がり、北側は、広い敷地にケヤキだのサクラだのヒマラヤ杉の樹などが植え

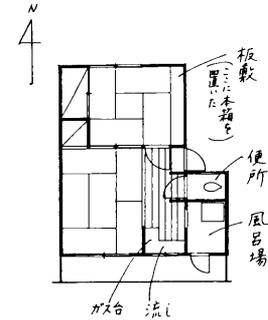


図 2 東京都住宅供給公社祖師谷団地 2K (昭和32年築)

られていて、まるで公園の中の団地のようにであった。場所は世田谷区祖師谷。環境は良いし、交通の便利は良いし、何しろ安い。今でこそ、2K なんて狭いの、押入れが少ないのって言われ、私もそう言うのだが、当時の私にしてみれば、こんなにありがたいことはなかった。なにしろ、当時までに都内を転々と下宿し、都内の勤務先に近いところは、値段の高い超閉空間で、多少とも緑の多いところは、遠かった。もう東京の閉空間にはうんざりしていたところであった。クーラーの嫌いな(当時の性能も悪く、値段も高く、体にも良くなかった)私にとって、この鉄筋 4 階は、夏はさわやかな風が通って快適、冬も照れば南の部屋は温室同然、冷えてもガスストーブで十分暖かかった。家の中に風呂があるというのも快適だった。2 間が畳敷きで、壁ぎわに本棚が安心して置けるよう幅 1 尺ばかりの板敷きがあるのも良かった。妻にとっても、当初は喜んでいて、ここは、私にとっては開放空間であり、妻にとっては閉空間であった。地の利からいって、扉を閉めれば空中の閉空間である。機密性も、トイレの音やドアを閉める音のほかはまことに良い。もちろんネコ、犬は飼えなかったが、ある日気がついてみたらハトがベランダの物置の上に巣ごもりをしていた。何と金属のハリガネの巣である。近所の工事現場から運んだものらしい。ひながかえって親の口の中に首をつこんで乳を飲むのが不思議だと妻が飽きもせず眺めていた。考えてみると、私たちも、ハトと同じような高原の岩場に住んでいたようなものである。当時の私たちには、高過ぎず、低過ぎず(1階に住んだ人は、押入れの結露に悩まされた)、管理は楽で、家賃は安く、今でも私はこういうところに住みたいと思っている。

(2) もっと広さを! —— 本と人に埋って

しかし、何年かたって、子供が 1 人生れ、もう 1 人生

れ、成長してゆき、親もきて暮し、相変らず客人も訪れて泊ってゆくとなると、この快適な空間の様相は変わってきた。居住性を悪くしたのは、私の本の増加であった。最初は1面に収まっていたものが2面になり、3面(?)になり、妻はついに「いつから古本屋を始める気か」と怒りだす始末。とって彼女の本だってふえているのだ。こうなると東西が壁で、南北が崖で、拡げようがなく、見せかけの開放空間であると実感した。やっぱり真のそれは、大地に直接つながっていないとてはならないと、今さらのように空をにらんだ。本は捨てられない。

そこでどうしたか。近くに一部屋を借りて本を移した。しかし、これは不便だった。真夜中(でない、子供が起きている間は仕事ができない)に、あの本がない、この本がないということになって、借りた部屋に本を取りに行くと犬にほえられたり、家主に文句を言われたり、その間に、考えていた内容は雲散霧消! 妻はさらに、お勝手の狭さ、押入れの狭さに悩んだ。しかし、良かったことのなかで最高のもは、住民が良い人たちで、親しく助け合える人がおおぜいできたことであった。

部屋の狭さの悩みは、私たちだけではなかった。少しでも広い住居が空いたとき移してもらいたいと公社と交渉をしたが、それは希望者が多過ぎ、広い住居が空くことは少なかった。私たちは、頭数がふえた家族を入れるための、もっと広い公営住居(団地)をもっと多く造ってほしいと政府や都に陳情もした。が、容易にはふえなかった。私は、当時あって、2Kや2DK自体が悪いのではなく、建築行政が次へのステップとして、より広い公営住居の大量建設に進まなかったことを心から残念に思う。

諦めてこの団地を去る人がふえていった。せつかくで始めた新しい村がこわれ、親しくしてきた人が次々に去り始めた。

(3) 一時避難

見かねた妻の姉夫婦(子供がない)から、自分たちが住んでいる母の家を暫く貸してあげよう、暫くマンションに住むから、と言われて、妻は一も二もなく賛成した。私は、本音としては、移りたくなかった。その先がこわかった。

昭和45(1970)年の初め、通勤に1時間半かかる(などと言ってはいられないのだが)横浜の山の上の1戸建庭付きの家に引っ越した。団地の2Kには13年間いたことになる。横浜の家は悪くなかった。南斜面の日当りの良い土地に、閉空間と開放空間を組み合わせた4DKで、妻の母と私たち5人が住み、私は、書齋兼書庫として応接間を占領した。妻は、念願の犬を2匹も飼った。しかし、「暫く」はすぐ経ってしまった。また家探しの苦難が始まった。今度は、4人家族である。あのときの追いつ

められた惨めな思いは、今も忘れられない。周囲の眼は「男たるもの家1軒を建てるのは当然の仕事」という。貧乏学徒には無理な注文であった。これこそ、建前の最たるものであった。

4. 2×4工法閉鎖型住居の住み心地

(1) 小箱の中の小さな個室と居間

昭和50(1975)年、結果として図3のような家に住むことになった。外観も間取りも、妻が中心になって大工さんに注文を出して作ってもらった、いわゆる2×4工法による住居である。妻は、喜々として見取り図案を画いては消し、消しては画いた。2×4工法にした理由は、安いからということに尽きる。当時流行し始めた時期で、この家はモデル住宅ということで、建築中から見学者が絶えず、建築雑誌にも載った。先輩のご厚意と好条件に恵まれ、工事費も土地代も、今に比べればはるかに安く出来上った。しかし、それでも私たちにとっては大きな借金を背負いこむことになった。出来上った住宅は、まさに箱に窓とドアをつけた閉空間の2階建てで、1階南側の一部にだけガラスの引戸を付け、庭に出られるようになっていた。娘は、前の学校に入学を許されて友だちとの再会を喜んだが、今度は息子の方は友だちとの別れを悲しんだ。それはともかくとして、この家と使い方は、次のようなものであった。

玄関を入ってすぐの南の庭に面したガラスの引き戸の部屋が、応接間兼居間である。最初は、その奥の1階の畳の部屋に掘りごたつを用意したが、それを使うような

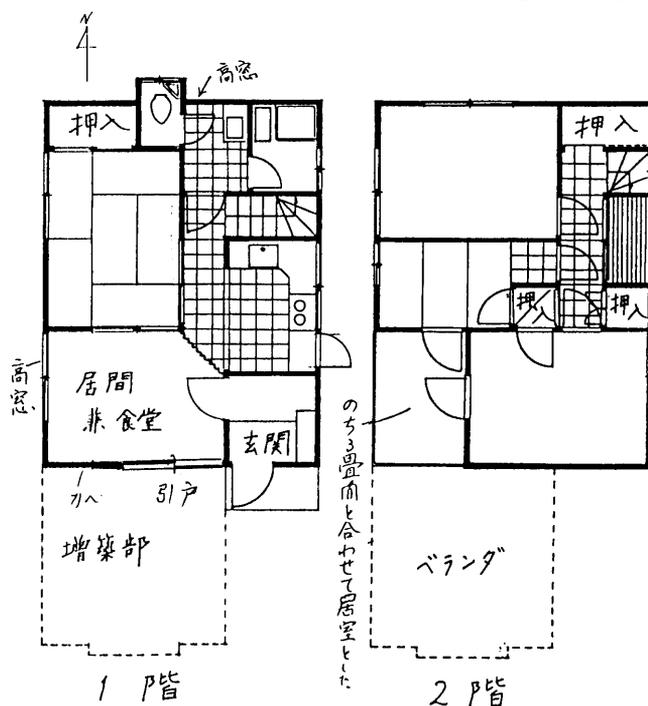


図3 2×4工法による家

機会はこなかった。応接間兼居間にテレビを置いたせいかもしれないが、家族も客も、テーブルと椅子でくつろいだ。子供たちが個室を欲しがった年齢のせいでもあったが、結局は、この食堂兼居間以外は、4室が4人の個室として使われることになってしまった。子供たちは、自分の部屋に施錠したがった。しかし、それは許さなかった。テレビのチャンネル争いはあったが、テレビは食堂兼居間に1台しか置かなかった。ややもすれば個室にこもりがちな家族が、ともかくも集まって話し合える場所を確保したかったためである。しかし電話の争いは容易に解決できなかった。解決策として入れた割込み式親子電話（キャッチホン）はかえって家族間の争いや先方に対する失礼の度合を深めた。考慮の末電話をもう1本ひいて連動させることで争いは激減した。かつての対外的な接客空間は、個室の電話室として使われることが多くなった。現実の往来でなく、電話線を通じて、実に多数の来客と対応し、また訪問もする生活が毎日行なわれている。

毎日めまぐるしく、きしみがちな生活の中で、興味あるのはもう一人(?)の家族、猫の役割である。家族がおのおの勝手に、猫に対して心の憂さをぶつける。つまり本音を言うことで憂さを晴らしている。互いにもし、人間に対して直接言ったら角がたって仕方のない本音を、猫に向かって言う。人に聞えよがしに言うのではない。猫に言うのである。その効用の良さを、かつて俳優の赤木春恵が新聞に書いていたが、これは、実感できる不思議な効用である。猫には定席はない。設けてやってもすぐ変わる。猫はこの家の中で、そのとき相対的にいちばん快適なところに坐って、この人間の本音を聞くのである。私は、猫が好きというわけではないが、猫の効用の大きいことには感心している。

(2) 私の2×4工法住宅の欠陥

ところで、この2×4工法の家であるが、大工さんは随分と丁寧に造って下さったにもかかわらず、設計上の問題から、というより、当方の無理な要望から幾つかの大きな欠陥があった。そのひとつは、1階の上に設けた3畳分くらいのベランダと2階の壁との接合部分から雨が浸みこんで漏れることであった。南から吹きつける雨のときはとくにひどく1階の壁や電線のコードを伝って室内に雨水が流れ落ちた。いろいろと調べてもらい、天気の良い日にホースで水をかけて調べもしたが、どんなしくみで雨が漏るのか、決定的なことはわからなかった。清家清さんに「雨量の多い日本でフラットな屋根なんて無理ですよ。アフリカならともかく」と笑われてしまった。最終的には、ベランダを壊して、2階の部屋を上げる、つまり普通の屋根をのせることで解決した。

もうひとつの欠陥は、風通しが悪いことである。当時

すでに新聞にも「2×4工法の家は、結露しやすい」と出ていたので、南北に風が抜けるようにしてもらったつもりであるが、造って間もなく、1階の畳の間に大量のダニが発生した。はじめ、畳の上の黒いハンドバッグが白い粉でまぶしたようになった。それが動いていることがわかったとき、妻はショックで呆然としていた。しかし、それはまだ植食ダニであった。やがて、このダニを食べる動物食ダニが現れるともうだめである。人も刺される。頭の痛くなるほど殺虫剤をまいても、顕微鏡のレンズで覗いてみると畳の目の間を、あのいかつい怪獣が平気で出たり入ったりしていた。畳を上げて陽に干して、消毒してもだめ。畳に注射器のようなもので強力な殺虫剤を注入して、漸く解決できたが、翌年また現れた。薬が悪かったという話も聞いたが、何ととっても、風通しの悪いことが最大の理由であろう。なにしろ、在来工法の和風建築では床が高く素通しで、畳の下の板はすき間だらけで、風通しの良いことこの上ない。それが2×4工法の家では、畳の下には、何枚ものベニヤ板が釘で打ちつけてあり、周囲は、ほぼ完全な箱であって、風の通りようがない。これはもうダニ発生装置である。そう言えば、昔住んだコンクリートの団地でも畳があり、それも床下はふさがれていた筈であったが、南側が引戸で全面的に開き、北の窓も大きかったせいか、ダニの発生はなかった。これまた、青木志郎さんに、「2×4工法は問題が多いよ」と、あっさり言われてしまった。

まるで、それが予言であったかのように、さらに手痛い打撃を受けた。数年後、閉めきった風呂場の流しに羽アリが数匹いた。やられたと思った。家を建てたとき消毒してあるから10年くらいは大丈夫だと考えていたのが甘かった。調べてみると、風呂場周辺の根太も、脱衣場の床板も、そして壁の内部もすっかり白アリに食い荒らされていた。どうも、風呂場の床面から床下に水が漏れてぬらし続けていたらしい。床板も根太も湿っていた。結局、この風呂場周辺も、築10年を経ずして造り直すことになってしまった。

かつて祖父が、家の中に水を使う流しや風呂場などを入れることを極度に嫌ったわけが今にして身に滲みてわかった。床下は低く、暗く、点検も容易でない。修理の大工さんに言わせると、これでも高い方で、こういう風呂場の白アリ被害はざらにあると聞き、情けなかった。家を造った大工さんも、私も和風が好きなんだけれど、2×4工法は安いからね。と言っていたのを噛みしめた次第である。無理な注文をし、忙しさにかまけて、日頃の手入れ点検を怠った自分自身が悪いにきまっているが、やはりわが国におけるこの種木造建築物の経験不足にも1因があることは否めまい。在来工法の大きな家が築70年を経てなお、基本的なところの傷みがなく、ますます磨きがかかるのと比べると、何たる不経済なことか

と思う。しかし、また、ここで、在来工法の家との比較において、大きく反省を迫られもした。それは、先にも述べたように、在来工法の家は、日常的に手を入れ、たえず更新しながら使っていた。例えば障子や襖の貼り替えが、戸や敷居の手入れ、畳の手入れ、雨の日の家のまわりの水捌けの点検、雨樋の枯葉とり、はては井戸の修理、そして便所の汲取りの後始末までそうであった。面倒で嫌なことであったが、故障箇所が発見され、大事に至らず修理されることが多かった。つまり、たえず点検されていた。それに比べて、今の都会の2×4工法の家は、管理に手間がかからぬのは良いが、つい点検を怠ってしまうということがある。どうも、非近代的な手間ひまかけることが、家を長持ちさせてきたと言えそうである。そして、強く感じることは、在来工法の家は、磨けば磨くほど輝きを増した。それだけの良い材が使われていた、ということである。それに比べて、今の私の2×4工法の家は、すぐに虫に食われるラワン材ややわらかい米松、そしてベニヤ板と、まことに磨き甲斐のない材しか使われていない。子供たちも磨こうとしない。

さらに、かなり空想的なことではあるが、私がいま懸念している不安がある。2×4工法の家は地震に強いという。確かに今まではそうであった。しかし、やがてある日ある時、家がバラバラに解体してしまうのではないかという不安である。というのは、2×4工法の家は、木組みというものがまるっきりない。ものすごい数の釘だけで家が箱状に造られている。しかし、いかにたくさんの数打ち込んだところで、鉄釘は、条件如何では、いっせいにさびて腐る。私が自分で作った犬小屋はもちろんのこと、和釘を打ちつけた小さな祠でさえ、比較的短い期間でばらばらに分解しているのを私は見てきた。だから心配なのである。

(3) 本音としての不満と望み

さて、この2×4工法の家、妻も子供たちも結構喜んでいる。住み心地もまずまずである。現代生活の機能性から言えば在来住宅より良い。私も建前上は喜んでいる。世の常識から言えば、最高の条件における住宅と見えよう。しかし、私の本音を言えば、甚だ不満である。なぜ不満なのか、構造に関しては、強いて言えば開放空間でないということであろうか。しかし、問題は、そこにはない。都市部で開放空間の家を造ろうと思えば余程広い土地がなくては無理であろう。閉空間にも結構良いところはある。私の本音としての不満の最たるものは、かような家のためにローンの返済に追われ続けて、文化的に貧しい生活を送らねばならなかったことである。

では、これまで幾つかの住居を経験してきて、どのような家に住みたいと、本音は言うのか。私は、緑の多い敷地に立つ、家賃の安い、公営、中層の集合住宅を選ぶ。

それでは2Kでもよいのか。いや、広さとしては4LDK分くらいは欲しい。そして、内部は自分の希望で間仕切りが自由になる可変的空間であることが望ましい。外観つまり建物の外部や基本構造は、建築家にまかせよう。しかし内部は、可変空間であって、自分の思うようにしたいものである。本格的に品質の良い材料、例えばヒノキとまでいなくても、それに近い良質の木や和紙を使った内装にしたい。つまり、外観はともかく、内部は、自分の感触が本音で好ましいと思うような素敵な材料を使ってみたいのだ。随分前になるがコルビジエが、集合住宅の外はつくるが、内部は各自勝手にするがいいと言ったものを発表していたと思うが、それをさらに一歩進めた可変的集合住宅に住みたい。かく言うのは、目下のところは、ローンの苦痛から逃れたいと思うのが大きな理由であるが、それだけではない。日常、手、足、眼で耳で感じる生活そのものを大切にしたい。人間、せっかくこの世に生きてきて暫く生きて、また去らねばならぬ。やはり、内部の素敵な住居に住みたい。

人生にとって住居とは、そこで楽しく実生活のできる、つまり本音で生きる場であって、ローンに苦しんで、形式、つまり建前だけ存在する場ではない。あの世まで、家をもっていけるわけではないのだから。

5. 良いものには然るべき理由がある

「良いものは良い」。あたりまえのことであるが、前者の良いものとは、使ってみて良いものの意であり、後者の良いものは、使って良いものにはそれだけの客観的理由がある、ということである。

良いもの、として3つを挙げてみたい。1は木綿、2は、木、3は、和鋼である。

木綿の良さは、肌ざわりの良さ、吸湿性、通風性の程良さと言われるが、科学、技術のかなり発達したかにみえる今日でも、赤ちゃんの肌着としては、木綿にまさるものはなさそうである。私たちは、天然物より、安くて良いものを、大量に作ろうと歴史的に努力してきた。その結果として絹に代わるナイロンが合成され、今日日常化している。確かに安くはなり、品質も部分的には絹よりすぐれているが、しかし、ナイロンといえどもすべての点で絹にまさっているわけではない。体に着た感触は、天地の違いがある。まして、木綿となると、もう、赤ちゃんの肌にとって天然の木綿以上の合成品は今のところまだない。木綿の良さの根拠については、ここでは省略する。ついでながら、墨で文字を書き、水彩絵の具で絵をということになると、和紙以上の紙はない。和紙は丈夫で長持ちという点でも、抜群である。この点でまだ和紙以上の品質をもつ安い紙は作られていない。

さて、次は木である。木の良さについては、多くの人

が言及しておられるが、その強さに関して木の良さの根拠を明らかにされた研究に、小原二郎氏²⁾のものがある。小原氏は、ヒノキの柱は、切られてから200～300年の間は、強さや剛性がじわじわと増して2、3割も上昇し、この時期を過ぎて後、ゆるやかに下降する。その下りカーブの所に法隆寺の柱が位置していて、新しい柱とほぼ同じくらいの強さになっている。と言い、その理由を次のように説明する。木材の強さを支配する最大の組成分は、細胞膜を構成する長い糸状のセルロース分子である。セルロース分子には、結晶領域と非結晶領域があるが、木が切られて死に、古くなっていくにつれてその結晶化部分がふえていく。それとともに木の材質は硬くなってゆく。その一方で、古くなるにつれてセルロース分子の糸が切れてゆく。つまり、強くなる因子と弱くなる因子の両方が進行し、1300年くらい経ったときのヒノキの強さは、結果として、生きていたときと同じくらいになる、と。なるほど、この話を読んで私は、ひどく感心した。

さて、次は和鋼であるが、和鋼で作ったのみやナイフの切れ味はすこぶる良い。切れ味が鈍れば研ぐことで復活する。まさに、和鋼がなくなるまで切れ味を保つ。なぜ、そんなに切れるのか、一般には、鋼の純度が高いからだと考えられがちである。しかし、どうも、そういうことではなさそうである。私たちの研究グループは、ここ暫く和鋼の研究を行ってきたが、たまたま、文化庁から名刀といわれている日本刀の調査を依頼され、研究メンバーの一人で、金属学を専攻しておられる高橋恒夫氏（東京工大名誉教授）が、これを実行された結果、面白いことがわかった。大方の予想に反し名刀には、まじりものが多かったのである³⁾。まじりものの主なものは、鉄滓中のウルボスピネル (Fe_2TiO_4) と考えられる。チタンと鉄と酸素の化合物である。こんなものがまじっていて脆くならないのか。それが、ならないとなぜかが問題となる。それは、ひとつには、ウルボスピネル自体がきわめて硬いこと、もうひとつは、和鋼から日本刀を作るときに、何度も折り返して打ち鍛えることがプラスに働いているらしいことである。つまり、15回折り返して打ち鍛えれば、1枚の鋼板は 2^{15} (=約3万) 枚の超薄鋼板の合体物となる。100鍊の刀に至っては 2^{100} (=約 1.3×10^{30}) 枚の合体物になる。鋼の微粒子の列中に、硬いウルボスピネルが一定の間隔を置いてまるでクサビのように打ちこまれる構造をもつ。これは、刀を脆くするどころか、切れ味をよくする。日本刀という人を殺す武器で切れ味を論じるのは、あまり好みに合わないが、これがのみとなれば話は違う。のみについても、よく切れるものは、何度も折り返してあるに違いないと思う。

おわりに

日本の住文化の歴史的遺産には、こういう住居に住みたい、住居にこういうものを使いたいと思うものが多々ある。それは、この風土の中で、長年月の間に、住む人と建築家と物自体とが一体となって削りあげ、磨きあげてきたものである。開放空間ひとつについても、まさに平井さんが言われるように、日本住宅の開放性は、「木造であることが原因でも、木の柱と梁の構造が原因でもなく」、「日本の風土と日本人の風俗・習慣によるということができよう」⁴⁾というものであろう。

しかし、世の中は非情である。生産方式の変化、そして経済的問題などが、このような良い文化的遺産を使わせてくれなくなった。決して良い材がないわけではない。例えば、秋田杉は豊富にあるという。それが、値段などの点で、外材に押されて使われぬと聞いた。

新しいものでも、良いものは取りこんで使いこなせばよい。日本人は、長い間そうしてきた。しかし今は、一般庶民の住居に関する限り、「良いもの」というより、「安かろう悪かろう」が横行している。いずれは淘汰されるであろうが淋しい限りである。

私は、この小論で、自分が住んだ住居のうちの幾つかを歴史的に辿りながら、自分にとって住居とは何であったかを考えつつ、私の本音を実感的に述べてみた。どうも日本という国は、戦後、GNPは高くなったかもしれないが、住文化の面では、外観はともかくも、内部については、むしろ甚だ貧しくなっているといっていると結論せざるを得ない。事、私に関する限りそうである。今度生れ直してきたら、もっと高度な文化的内容をもった近代的住居を自分の手でつくって、そこに住みたいものである。

〈引用文献〉

- 1) 朱 曉雲 「中国の住居が箱なら、日本の住居は傘………中国から見た日本の住まい」、『すまいろん』1989年冬号、通巻9号、1989、2、P.58.
- 2) 小原二郎 『日本人と木の文化』朝日新聞社、1984、P.175.
- 3) 高橋恒夫、村上雄、岡田千里、藤井則久「日本刀を見直す」、『鉄と鋼』第71年第15号(1985)、1818～1824.
- 4) 平井 聖 「一つの仮説—日本住居の開放性をめぐって」、『風俗』第16巻、第3・4号(昭和53年10月) P.2.